

旧名古屋城下町遺構発掘調査
概要報告書

(V)

(名古屋市中区大須一丁目・旧紫川遺跡第Ⅳ次調査)

1986

名古屋市教育委員会



例 言

1. 本書は、名古屋市中区大須一丁目若宮大通地内で行なわれた第Ⅵ次旧紫川遺跡調査概要報告書である。
2. 本調査は、当該地の高速道路建設を企画した名古屋高速道路公社からの委託を受けて、名古屋市教育委員会が行なった。
3. 本調査は、昭和60年4月8日から7月3日までの延べ48日間かけて行なった。
4. 調査にあたっては、名古屋高速道路公社の関係各位より終始温かい御理解を得た。
5. 調査にあたっては、鴻池・大日本土木建設工事共同企業体、伊藤造園株式会社、アジア航測株式会社の協力を得た。
6. 本調査に関する調整事務は、名古屋市教育委員会文化課文化財係が担当した。
7. 本調査を担当したのは、名古屋市見晴台考古資料館、山田鉦一、伊藤厚史、野澤則幸である。
8. 本書の文責は野澤則幸にある。
9. 本遺跡出土の遺物、実測図等は、名古屋市見晴台考古資料館に保管されている。
10. 出土遺物について、渡辺誠氏（名古屋大学文学部）より貴重な御教示を賜った。芳名を記して謝意を表したい。

目 次

本文

I 調査に至る経過	(1)
II 遺跡の概要と環境	(2)
III 調査の概要	(5)
IV 遺構と遺物	(6)
1. 遺構の概要	(6)
2. 遺物の概要	(12)
V まとめ	(14)

図1 遺跡の位置	(2)	図版1 元文三年名古屋図 (名古屋市史より)	
2 発掘調査の位置と周辺の遺跡	(3)	2 P180地点	
3 遺跡周辺の地形	(4)	3 P181地点	
4 P180地点	(7)	4 P182地点	
5 P181地点	(8)	5 P183地点	
6 P182地点	(9)	6 縄文時代	
7 P183地点	(10)	7 弥生～古墳時代	
		8 古代～中世	
写真1 P180石垣断面	(6)	9 近世	
2 P183柱穴断面	(6)	10 近世	
3 P182配石土壌A	(11)	11 近世	
4 P183土器集積	(11)	12 近世	

I 調査に至る経過

中区大須一丁目に所在する旧紫川遺跡周辺は、最近の都心部再開発に伴う土木工事が頻繁に行なわれている地域である。本遺跡の場合は都市高速道路建設・日本電信電話公社及び中部電力株式会社の洞道工事、堅三蔵通遺跡は病院・倉庫増築工事、白川公園内では美術館建設によるものである。本調査は、昭和57年10月から始まるP 176地点から東へ続く旧紫川遺跡の発掘調査の一環であり、かねてから名古屋高速道路公社より調査依頼のあったものである。しかしながら、今回の調査箇所は昭和62年の供用開始部分に該当しないので、市教委側としては、それ程緊急を要するとは考えていなかった訳である。ところが、道路公社側の説明によれば、P 181～P 183地点については供用部分のスロープに挟まれる位置にあたるので、工法等を検討するに及び、供用開始時には少なくとも下部工事については完了している必要があるとのことであった。昭和59年10月の時点で、道路公社から昭和60年3月までに調査を終えて欲しい旨伝えられたが、市教委側には調査に応ずる余力がなかった為、大学等の研究機関に斡旋を努めたが、実現するには至らなかった。その為に、昭和60年3月には、市教委側としても早急に対処すべき懸案として、昭和60年度当初に調査実施へと踏み切る意思を固めた。昭和60年4月5日には調査委託契約を締結し、同年4月8日には調査を開始する運びとなった。

昭和57年7月 中部電力・電々公社の共同溝工事で本遺跡発見。

昭和57年10月～昭和58年2月 P 176・P 177地点、共同溝部分の調査（Ⅰ次）。

昭和58年10月～昭和59年1月 電々公社の洞道工事部分の調査（Ⅱ次）。

昭和59年9月 P 178・P 179地点の調査（Ⅲ次）。

昭和59年10月 道路公社より、昭和60年3月までにP 181～P 183地点の調査を終了して欲しい旨、依頼があった。

昭和60年3月 市教委側では、新年度当初に調査を予定する。

昭和60年4月5日 道路公社と名古屋市との間で、調査委託契約を締結する。

昭和60年4月8日 発掘調査（Ⅳ次）を開始する。

参考文献 旧紫川遺跡調査会 1984 『旧名古屋城下町遺構発掘調査概要報告書（Ⅱ）』

旧紫川遺跡調査会 1985 『旧名古屋城下町遺構発掘調査概要報告書（Ⅲ）』

名古屋市教育委員会 1985 『旧名古屋城下町遺構発掘調査概要報告書（Ⅳ）』

Ⅱ 遺跡の概要と環境

本遺跡は名古屋市中区大須一丁目若宮大通地内に所在する。南流して伊勢湾に至る庄内川と天白川に挟まれた、いわゆる名古屋台地上に立地する。シルト層と砂層が主体をなす熱田層が基盤となり、段丘中位面が形成されており、北西側から那古野台地、熱田台地、御器所台地、瑞穂台地、笠寺台地と呼称されており、本遺跡の場合は那古野台地西縁に位置する。当地周辺は都心部に含まれることから、アスファルト道路・恒久建築物の多くに地表面が覆われてしまい、肉眼による自然地形の観察は困難を極める。さらには、戦後の区画整理以降の土地改変も著しく、所によっては、深さ約5mにも及ぶ瓦礫層が自然谷地形を埋め尽くしている箇所も多く存在するようである。本遺跡も例に洩れず、表層の約3mから5mまでの深さまで被火災の瓦・レンガ等が埋まっており、わずかに地山面上で包含層・遺構部分が残されるのみである。このような条件下のもと、本遺跡が発見されるに

図1 遺跡の位置

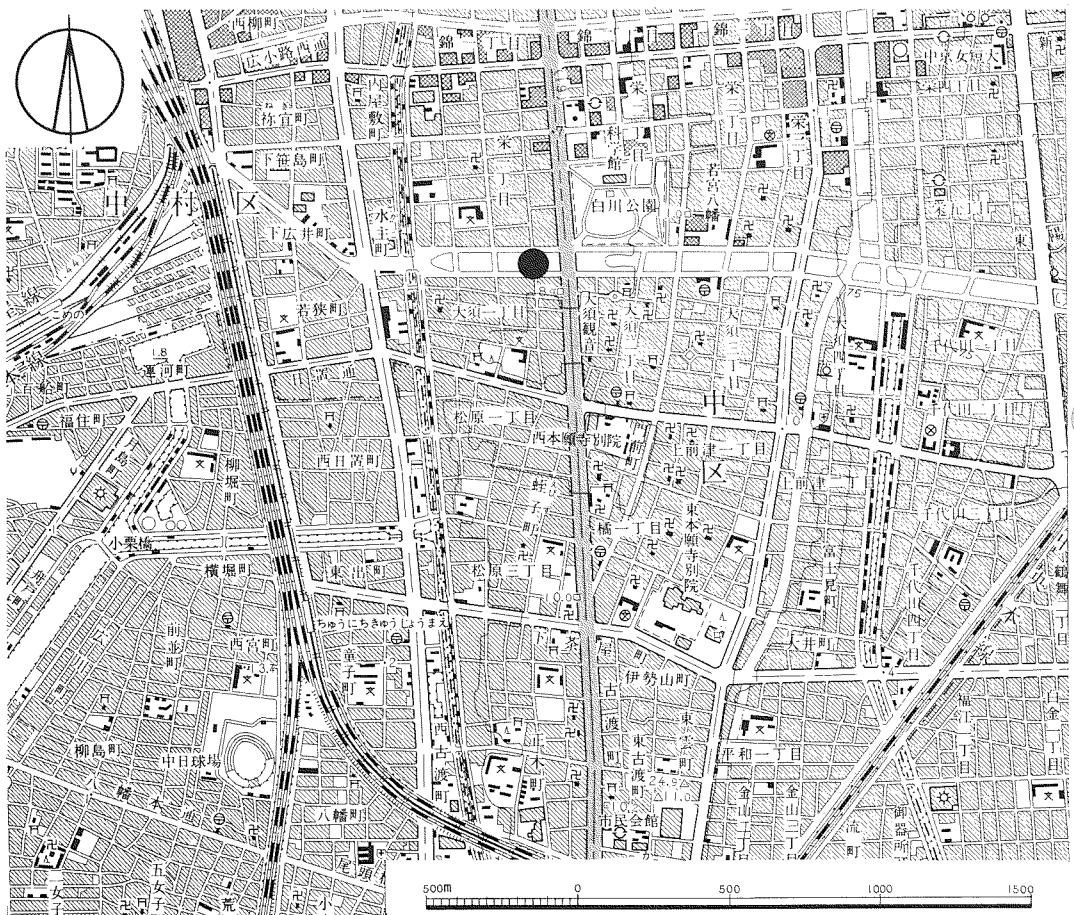


図2 発掘調査の位置と周辺の遺跡



及んだ契機も通常の分布調査等の手段に拠るものではなく、大規模な土木工事（昭和57年7月の電々公社・中部電力の共同溝工事）の手が加えられて初めて確認された訳である。それまでは、絵図面・伝承等の記録から、当地が名古屋城下町の一角に当るであろうと、漠然と推定されていたにすぎない。

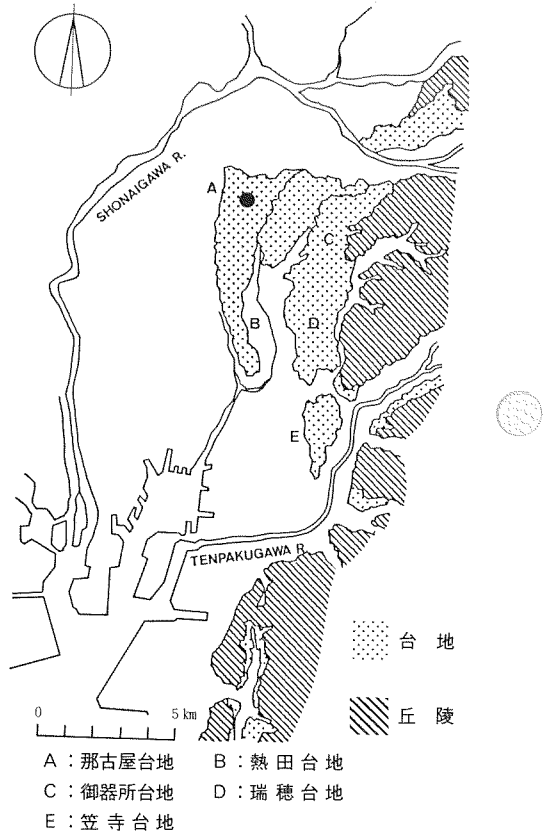
昭和57年11月～翌年の1月まで行なわれた第Ⅰ次調査では、縄文時代から中・近世に至る多量の遺物と共に、本遺跡名の由来ともなった近世期の「紫川」の護岸にあたと想定された石垣遺構が、約20mにわたって検出されている。昭和58年10月～翌年の1月まで行なわれた第Ⅱ次調査も同様の内容であったが、縄文・弥生時代の包含層が希薄であったことで異なる。この間に調査されたP176・P177地点では、縄文時代以降中世までの遺構・遺物が殆んど認められないかわりに、近世期の井戸状遺構、舟着場と

想定された石組遺構等が検出されている。昭和59年9月の第Ⅲ次調査では、Ⅰ・Ⅱ次で認められたと同じ石垣遺構が東西に伸びていることが判明し、それに伴って近世期の遺物多数を出土しているが、それ以前までの遺物は殆んど見る影もなかった。

以上の調査経緯から、絵図面から推定された堀川から東へ伸びる「紫川」の存在が実証されると共に、共伴して出土した諸々の日常生活具（陶磁器類を主として、金属製品・土製品等）の実態が明らかとなった。

本遺跡の周辺には、弥生時代以降、中・近世までの遺跡が、堀川沿いの台地西縁に多くを認めることができる。北西に近接して所在する堅三蔵通遺跡は、昨年までに3度にわたる調査が重ねられ、古墳・奈良時代の堅穴住居をはじめ、中世の濠状遺構・掘立柱建物、近世の礎石群・井戸等の多くの遺構が検出されている。本調査区のP183地点のすぐ北東に面する白川公園内では、昨年の夏、美術館建設に伴う調査が行なわれ、近世から近代に降る時期の墓地の一角が顕われることとなり、往時の葬送儀礼の一端を知る好機を得ている。

図3 遺跡周辺の地形



Ⅲ 調査の概要

本調査区は、中区大須一丁目界隈を東西に横切る、いわゆる「百メートル道路」中央の緑地帯内にあり、Ⅲ次調査区のP 179地点から約100m程東へ寄った位置（P 180地点）から、国道19号線との交差点付近（P 183地点）までの間で、4箇所に分けて設定した。対象とした面積は最終的に約960㎡で、その内訳はP 180地点で約248㎡、P181地点は約155㎡、P 182地点は約298㎡、P 183地点は約259㎡であった。

発掘調査が開始されたのは4月8日であるが、それ以前までに表土剥ぎの行程を完了している。調査を終了したのは7月3日で、延べ48日間を要した。調査はP 180とP 181地点を同時併行する形で始め、終了次第、P 182・P 183地点へと進行させた。以下、調査経過について順を追って略述する。

P 180・P 181 地点

4月8日 調査を開始する。P 181の攪乱除去。早くも発掘区北側において、黒褐色を呈する包含層を一部確認する。発掘区南側において、円礫で構築された石垣の上端を認める。

4月9日 P 180の攪乱除去。一定間隔で並ぶ礎石多数が現われ始める。

4月10日～4月25日 攪乱及び包含層の掘り下げ。遺構検出及び掘り下げ。

4月26日～5月1日 P 180のピット・石垣断面図の作成。

5月8日 P 180・P 181両地点の清掃の後、全体写真を撮る。

5月9日 写真測量の為に写真撮影。

5月13日～5月17日 P 180・P 181両地点の土層・石垣断面図の作成の後、セクションベルトを取りはずし、終了とする。東側のP 182・P 183地点へ進行する。

P 182・P 183 地点

4月24日 P 182の攪乱除去を始める。攪乱に混じって、弥生土器・山茶碗小片を認める。

4月25日～5月28日 攪乱及び包含層の掘り下げ。遺構の検出及び掘り下げ。P 182で円礫で構築された石垣・配石土壌等を検出する。

5月29日 P 183の土層断面図を作成する。

5月30日～6月5日 包含層及び遺構の掘り下げ。P 182・P 183両地点で、発掘区北側の黒褐色を呈する包含層中から、縄文・弥生土器、山茶碗等の比較的多くの遺物が出土した。

6月6日 P 182の土層断面図の作成。P 183の清掃。

6月7日～6月10日 P 182・P 183両地点の清掃の後、全体写真を撮る。

6月11日 写真測量の為に写真撮影。

6月12日～7月3日 包含層の残存部分の掘削。石垣断面図の作成を終えて、調査完了。

Ⅳ 遺構と遺物

1. 遺構の概要 (図4～7、図版2～5)

調査したのは、Ⅰ次とⅢ次調査区に挟まれた位置にあるP 180～P 183地点までの計4箇所である。各地点とも相当に攪乱を受けていたものの、近世に遡る可能性のある遺構を比較的多数検出することができた。主要なものとしては、前回までと同様の石垣列の他、柱穴群、土壇等をあげられるが、共伴する遺物に明確なものがなく、時期を特定することが困難な場合が多い。

P 180 発掘区南端において、長さ約13m・高さ約2mの規模で石垣列を認めた。人頭大の円礫を用いた乱石積の構造で、透き間には防水用と装飾を兼ねた漆喰が厚く塗り込まれている。石垣構築に際しては、以前まで自然流水路となっていた部分を一部整形して用いられており、掘り方の幅が約5mと広がっている。発掘区の北側では大小100箇近くの柱穴や、約20を数える不整形な土壇状の掘り込みを確認した。注意すべきは、柱穴のうち約30が、その内側に円礫を積み重ねていることで、中には5・6個を数える場合があった。

P 181 当地区では石垣の他に特にめぼしい遺構は検出されていない。長さ約10m・高

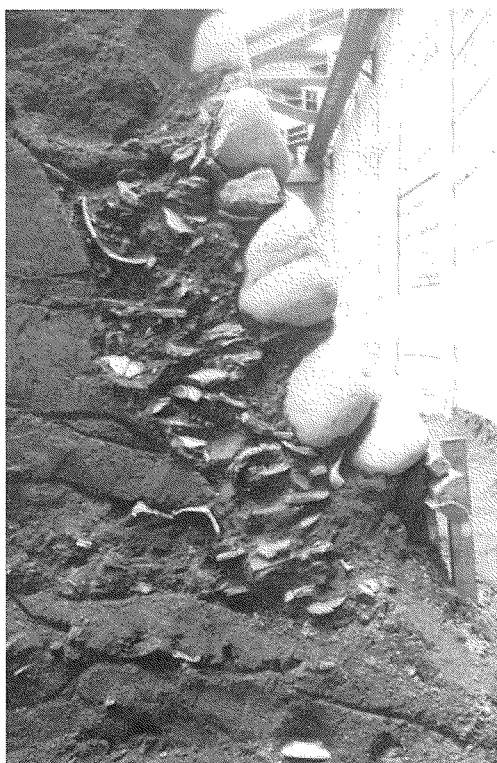


写真1 P 180 石垣断面



写真2 P 183 柱穴断面

图4 P 180 地点

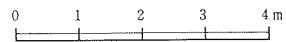
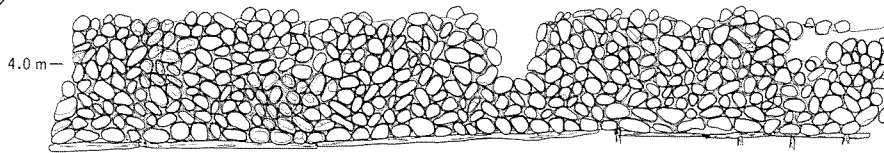


图5 P 181 地点

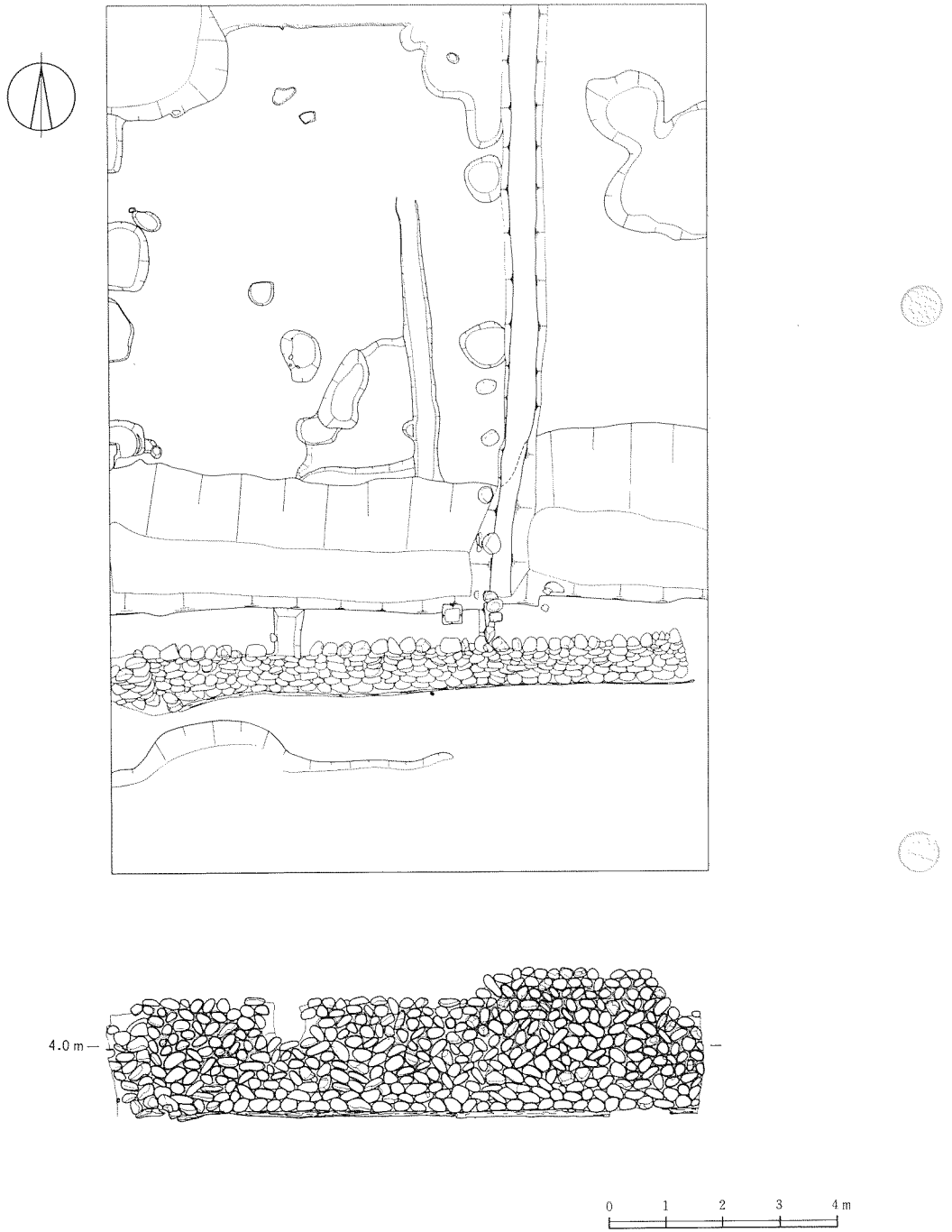


図6 P 182 地点

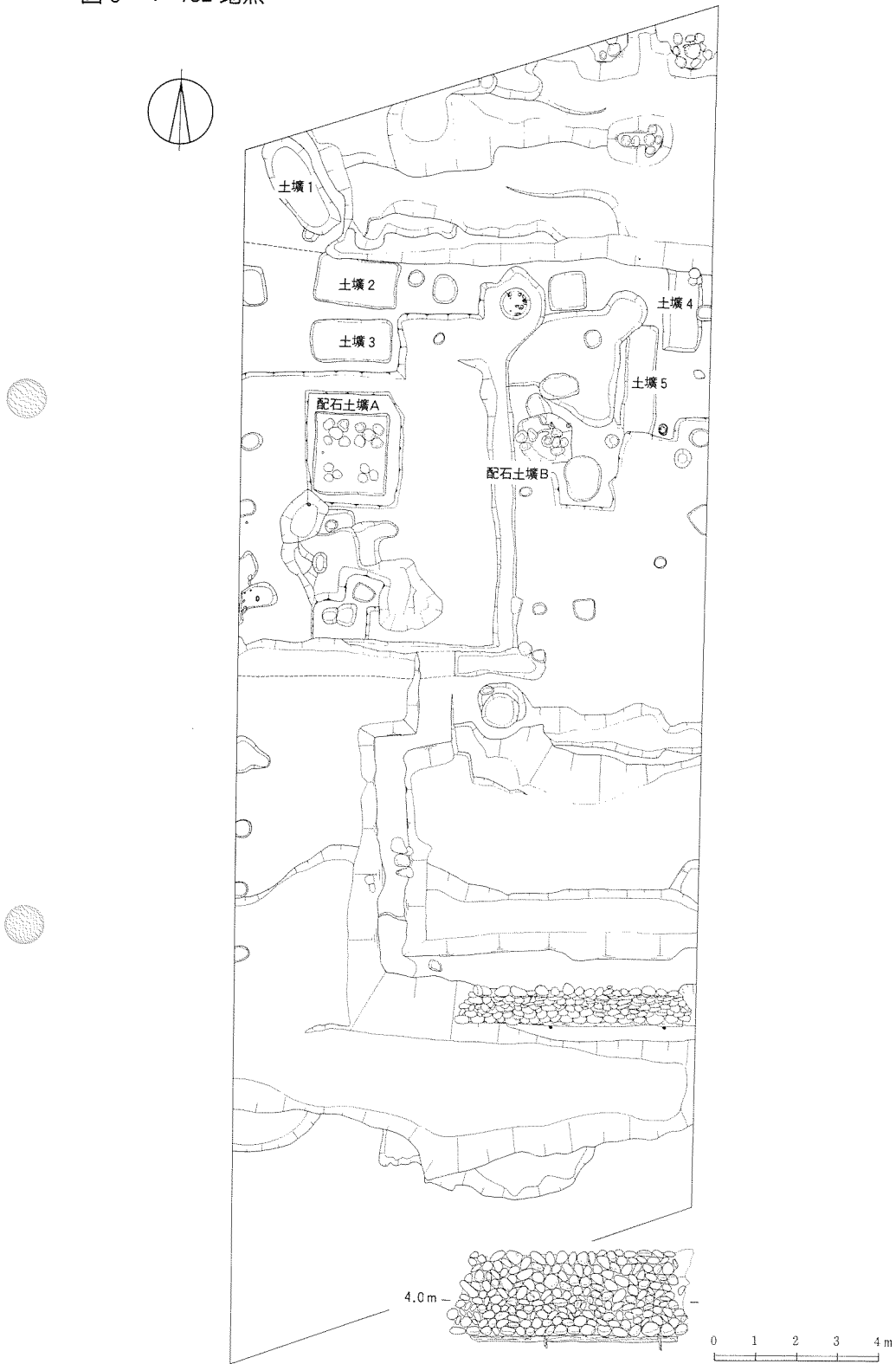


图7 P 183 地点

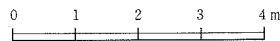
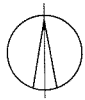


写真3 P 182 配石土壌A

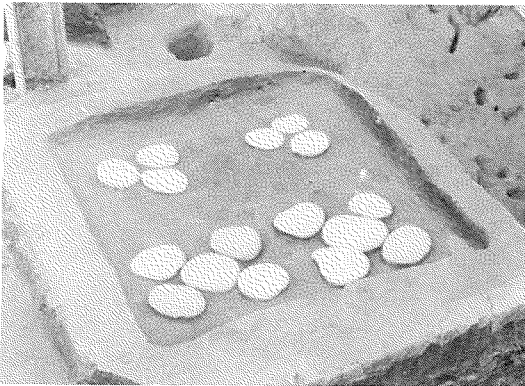
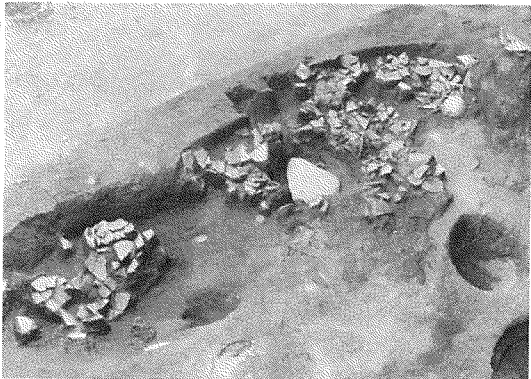


写真4 P 183 土器集積



さ約 2mの規模で検出された石垣はP 180 から続くもので、部分的に漆喰の色鮮やかな部分が認められることから、補修工事の行なわれた様子が伺える。掘り方の幅は約 4mである。発掘区の北側では厚さ20cm程度の黒褐色土層が広がっており、縄文時代以降中世に至るまでの遺物が混在して出土した。

P 182 発掘区の南側では、P 181 地点から続く石垣が検出されているが、対岸のあるべき位置に攪乱が及んだ為か、対をなす石垣を認めることがなかった。掘り方の幅は約 7mと広く、P 180 同様、自然流水路を利用して構築されている。出土遺物の最も豊富な箇所の一つであり、馬の目皿の完形品が出土していたりもする。発掘区の中央部分では、大小約10基の土壌が検出されており、なかでも注意されるのは、隅丸長方形プランの土壌 1

～5、扁平円礫を敷き並べられた配石土壌A・Bである。発掘区の北側では、幅約3～5mの範囲内で、深さ約2mにも及ぶ落ち込みが認められたが、出土遺物が少ないことから時期不明である。この落ち込みから発掘区の中央にかけては、P 181 同様の縄文から中世までの包含層が北側に行くに従い厚みを増して広がっていた。厚いところで約20cmを測る。

P 183 I次調査区に最も近く位置する為、縄文時代の良好な包含層が残存するであろうと考えられた地点である。実際にはP 181～P 182と同様で、砂層（ベース）直上の黒褐色土層内で、縄文から中世までの遺物が混在した状態で検出されたにすぎない。量的には弥生土器が大勢をなすもので、土器集積地点では殆んどが欠山期に属するものであった。発掘区の南側ではP 182から伸びてくるのではと考えた石垣が存在しないかわりに、人頭大の角礫を積み重ねた石垣Aと、東端に位置する石垣B（こちらは円礫）の2列を確認した。この他にも、それらしい痕跡として、南東部分に坑列のみ検出している。これらのことから、P 180からP 182へと東へ伸びる石垣は、当地区の南側を迂回していることが推定され、調査区内に現われた石垣・坑列等は、それ以前までに繰り返し構築された護岸壁の痕跡であったことが推測される。発掘区の中央部分では、P 180と同様の柱穴多数が検出されている。

2. 遺物の概要 (図版 6～12)

今回の調査で出土した遺物は、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・山茶碗等がコンテナケースで約 8 箱認められた他、近世以降の陶磁器類約 200 箱を数えた。その出土位置は、縄文時代から中世までの遺物が P 181～P 183 地点の包含層内（黒褐色土層）で、近世以降のものは川床の包含層内（シルトと砂の互層から形成されている。）の場合が最も多く、次いで石垣の掘り方内で検出される場合があり、他は表土の攪乱層に伴うものである。これより以下、各時期ごとに略述する。

縄文時代 (図版 6)

縄文時代の遺物は、P 181～P 183 地点の黒褐色土層内でコンテナケース約 2 箱分が出土している。最も多く出土したのは P 183 地点である。粉々となった土器片が大半で、中期前半から晩期後半までのものが混在した状態で出土しており、それに伴って、石器 11、土器片錘 1 が認められた。中期の土器には阿玉台様式、加曾利 E 様式併行期のものがあり、1 点のみ出土している土器片錘も、該期に属する粗製土器片を再利用している。後期には称名寺・中津様式、堀之内様式、凹線文土器様式の 3 者が認められる。晩期には半截竹管文土器様式、晩期安行様式（1 点のみ出土している。搬入品であろうか）、突帯文土器様式の 3 者が認められる。最も量的にまとまって出土したのは、I・II 次調査でも確認されている称名寺・中津様式のものである。

出土した石器の内訳は、石鏃 1、打製石斧 1、磨製石斧 2、礫石錘 4、凹石 1、磨石 2 である。石材はチャート（石鏃）、安山岩・緑泥片岩（石斧）、風化円礫（礫石錘）、砂岩（凹石）、安山岩・石英斑岩（磨石）を選択している。

弥生から古墳時代 (図版 7)

該期の遺物には弥生土器・土師器・円筒埴輪・須恵器等の他、弥生時代の打製石鏃 1（現存長 4 cm を超す）がある。出土した位置は P 181～P 183 地点の黒褐色土層内である。総量でコンテナケース約 5 箱を数えるが、そのうちの大半は、P 183 地点で比較的まとまって出土している欠山式土器である。

弥生土器には山中期から欠山期までのものが認められる。山中期のものには広口壺・台付甕・高坏等が、欠山期には丹塗広口壺・高坏等の器種が認められる。

土師器には須恵器出現以前の広口壺・高坏・小型壺と、神明期の高坏等の少数が認められる。

古墳時代の須恵器には、P 181 と P 182 地点で出土した罫・高坏・坏身等がある。5 世紀に遡るものは認められない。

P 182 地点の黒褐色土層内で、円筒埴輪の小片 6 点が出土している。いずれも外面 2 次

調整にC種ヨコハケが用いられており、胎土中に白色縞を多数認める。黒斑がないことから、窯焼成によるものと考えられる。

古代から中世（図版8）

P 181～P 183の各地点において、奈良・平安時代の須恵器・平瓦、中世の中国陶磁・山茶碗・四耳壺・土師器等が少量出土している。出土位置は殆んどがベース直上の黒褐色土層内であった。

奈良時代の須恵器には坏・盤・甕等が認められる。平安時代の須恵器には坏・鉢がある。両時期のいずれに伴うか不明であるが、凸面縄叩目痕・凹面布目痕を残す平瓦1点がある。

中世の遺物には竜泉窯系の青磁蓮弁文碗1、瀬戸窯の製品と思われる四耳壺1、北部系の山茶碗1、猿投産の山茶碗・小皿約20、土鍋1等がある。山茶碗のうちで重ね焼(10枚)の状態のままのものは、P 182地点の川床で出土している。ローリングによる磨滅痕が著しい。

年代的には12世紀から14世紀までの幅が与えられる。

近世（図版9～12）

出土遺物の大多数を占めるのが陶磁器類であり、それに加えて、土製品・金属製品・石製品等がある。出土位置の殆んどが川床の砂利層及び石垣の掘り方内であるが、この他に表層の攪乱部分でも少数認められる。

陶磁器のうちで最も多く出土しているのは瀬戸・美濃窯の製品であるが、この他に、常滑窯と伊万里窯の製品が少数加えられる。瀬戸・美濃窯の製品のうち日常用品としては、碗・皿類をはじめ、灯明皿・ひょうそく・徳利・摺鉢・おろし皿・土瓶・火鉢・手水鉢・水甕・水注・水滴等があり、仏器類には香炉・高坏・小型徳利・花瓶等があり、極めて多種多様である。常滑窯の製品としては、いわゆる「赤物」と言われているもののうち、大いぶし、蚕火入れ、手焙り等がある。

土製品には土器・玩具・焼塩壺の3種が認められる。土器はロクロ成形で回転糸切り底の、いわゆる「かわらけ」約50点がある。口縁部に炭化物を残すものについては、燈明皿として使用されたものと考えられる。玩具類（あるいは報賽品か？）には僧侶・馬・五重の塔・猿等を模したミニチュア像約30の他、凹面に布目痕を残す手捏メンコ1等がある。
(註)
焼塩壺は渡辺誠氏の分類で言う、E類とC類の各1点が出土している。

金属製品には文久永宝3と、寛永通宝9の計12枚の銅銭がある。

石製品には、裏面に落書が残されている硯2がある。これとセットをなす遺物として、墨書陶器類約50・陶製の水滴1等がある。

註 渡辺誠 1985 「焼塩」 『講座・日本技術の社会史』第2巻 日本評論社

V ま と め

旧紫川遺跡では、本年度調査分を含めると第Ⅳ次を数えることになる。出土遺物には縄文時代早期から晩期、弥生時代後期から古墳時代、古代から中世、近世以降と各時代にわたるものがあり、数量・種類共に豊富である。それに引き替え、検出された遺構は貧弱で、中世の土壇、近世の石垣・柱穴・溝・土壇等があるにすぎない。それにしても、遺跡名の由来となった「紫川」の存在が、絵図面に記載されている内容と同じくして、堀川から本調査区まで東進して伸びることを確かめられたことは、重要な成果であったと言える。しかしながら、本調査によって検出された石垣列の多くは、幕末以降近代に至るまで機能していたものと考えられ、さらには、補修・改修が繰り返行なわれたであろうことを想定すると、各年代別の流路位置を正確に把握することは困難である。名古屋城下町関係の調査は最近になって徐々に増えつつある段階で、名古屋城二の丸庭園跡・中村区小鳥町遺跡・西区幅下小学校遺跡・東区尾張藩御廟所跡・中区堅三蔵通遺跡・中区白川公園遺跡等がある。いずれの場合においても遺物のみが優先し、当時の生活を物語るにふさわしい遺構の検出例は稀である。今後の資料の蓄積が待たれる。

今回の調査で出土した縄文土器には、Ⅰ次調査で認められた早・前期のものが欠落しているとはいえ、中期から晩期に至る各時期のものがみられる。とりわけ、称名寺・中津様式に該当するものはⅡ次調査でも出土していることから、量的には最も充実している。しかしながら、小破片のものばかりで出土状態も悪いことから、資料的価値を半減させている。弥生から中世の遺物は量的に貧弱で見るべきものがないものの、須恵器出現以前の土師器少数が認められたことは、堅三蔵通遺跡との関連で注意される。近世期の遺物は先回までの調査内容と同じくしているが、墨書陶器多数の存在は際立っている。

本遺跡を取り巻く周辺には、縄文晩期の岩井通貝塚、弥生時代の西脇遺跡・松原遺跡、古墳時代の堅三蔵通遺跡・旅籠町遺跡・松原遺跡・日出神社古墳・那古野山古墳・浅間神社古墳・大須二子山古墳、古代から中世期には堅三蔵通遺跡・旅籠町遺跡・日置城跡・松原遺跡等があり、台地縁に沿って多くの遺跡が密に分布する。縄文時代に属する遺跡は、中区全域に範囲を広げても、名古屋城天主閣貝塚・古沢町遺跡・岩井通貝塚等の晩期のものばかりで、それ以前のもの、ようとして知られていない。本遺跡が唯一ということになるが、小規模な遺跡が点在する可能性が秘められている。弥生時代以降中世の調査例としては堅三蔵通遺跡が該当する程度で、不明な部分が多い。近世期に属する最近の調査例には白川公園遺跡がある。墓地の一角が明らかにされている。

当地周辺の発掘調査が増加する現在、近い将来に託された課題は多いと言える。

版 图

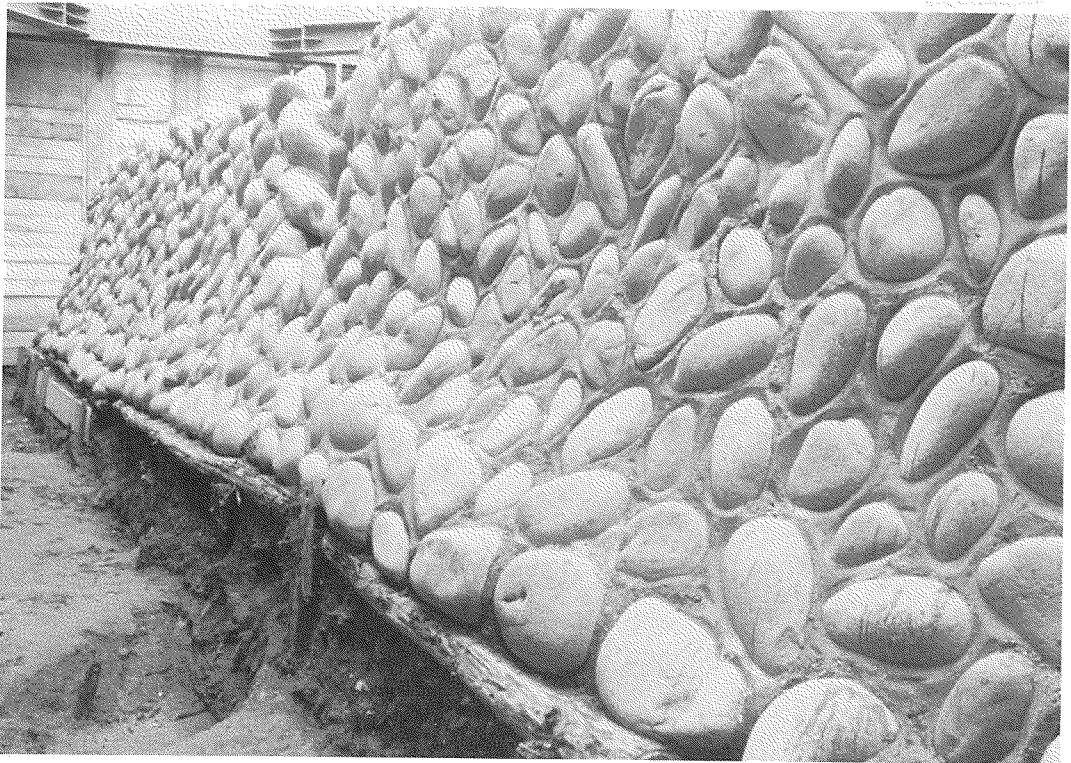


図版1 元文三年名古屋図 (名古屋史より)

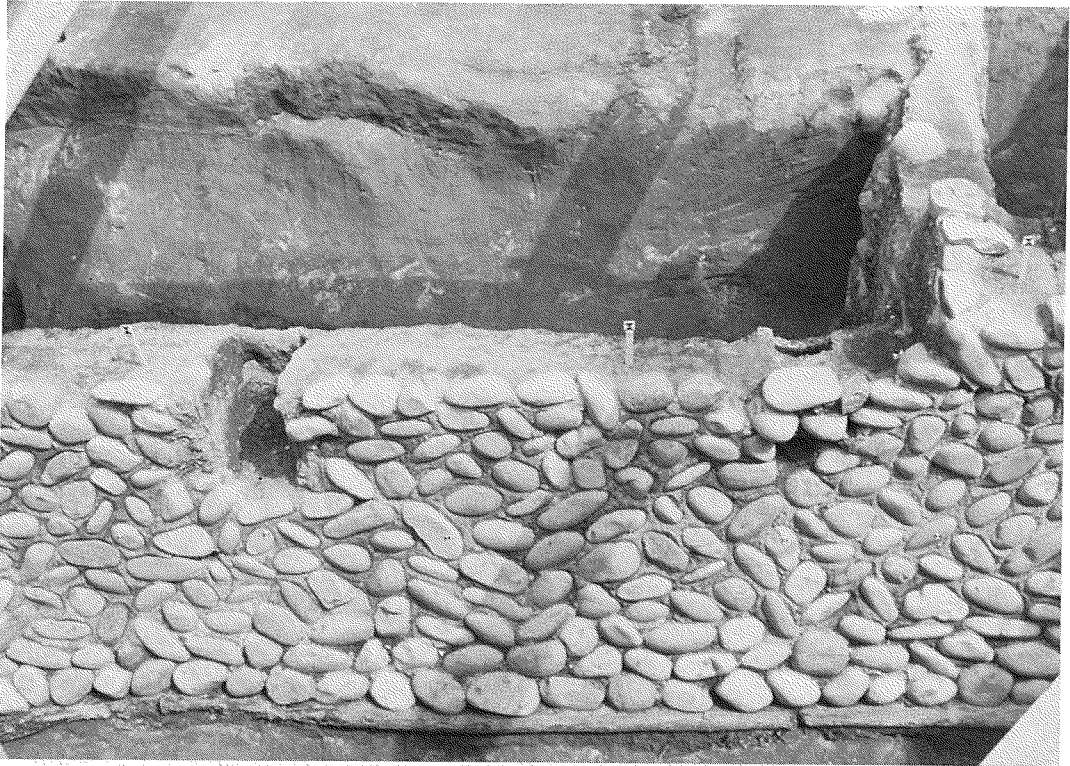




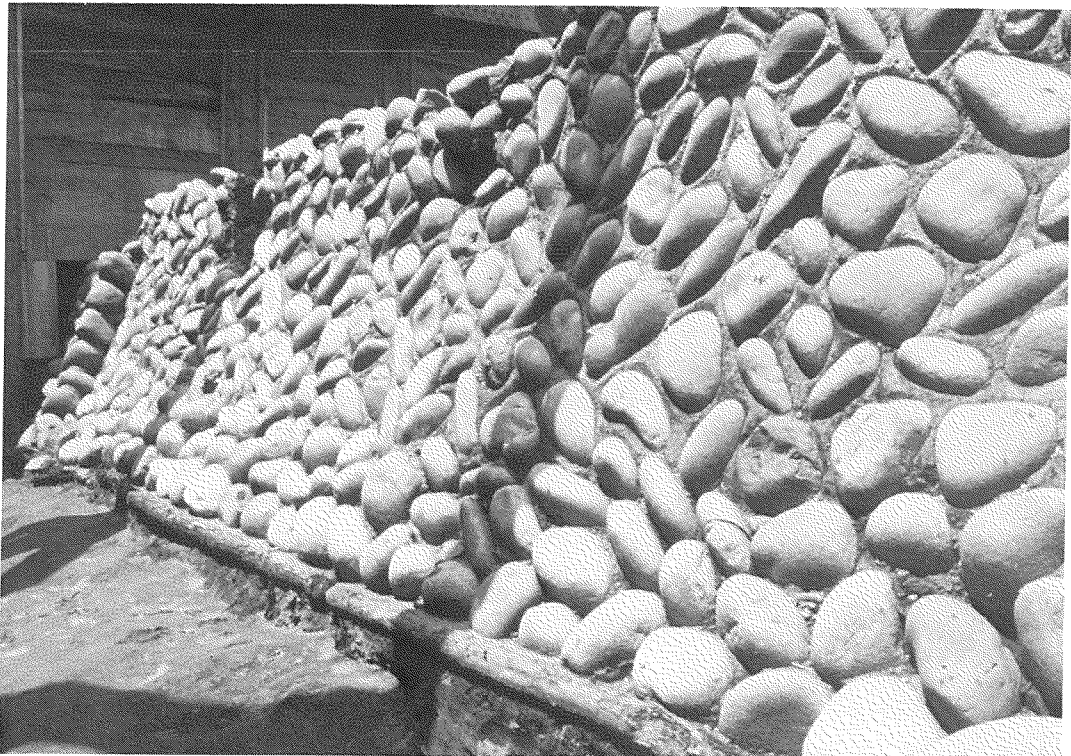
全景 (北から)



石垣近景 (南から)

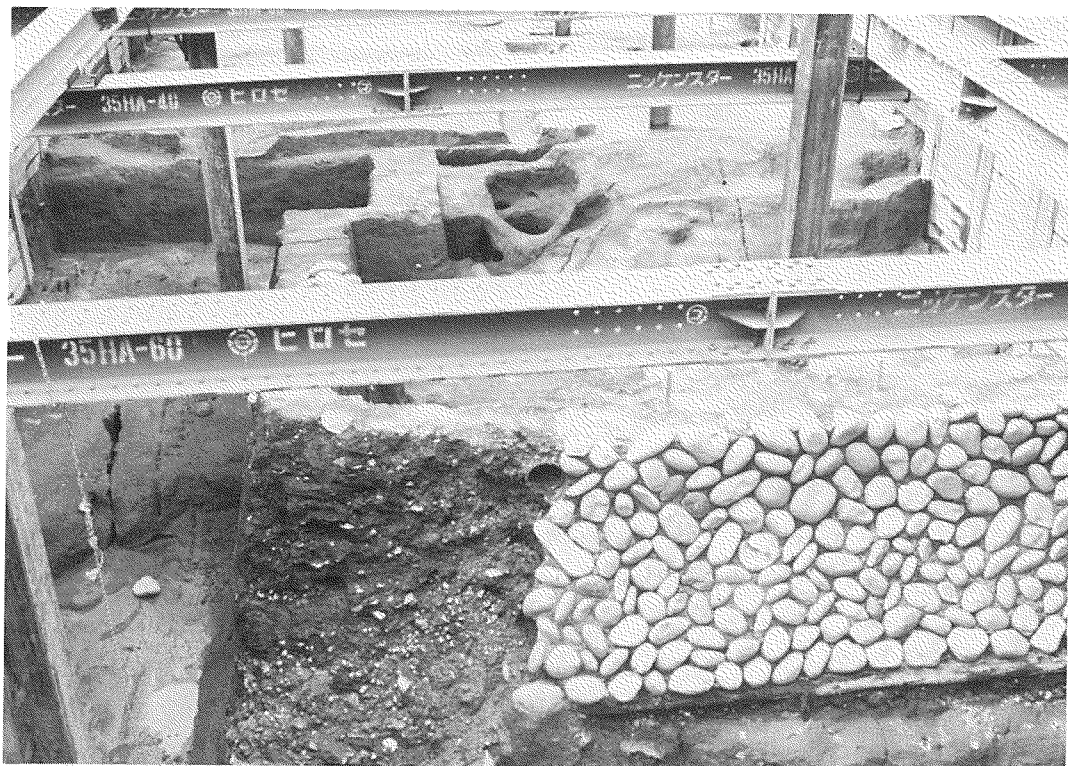


発掘区南側（南から）



石垣近景（東から）

図版 4 P 182 地点



全景 (南から)



発掘区北側 (東から)

図版5 P 183 地点

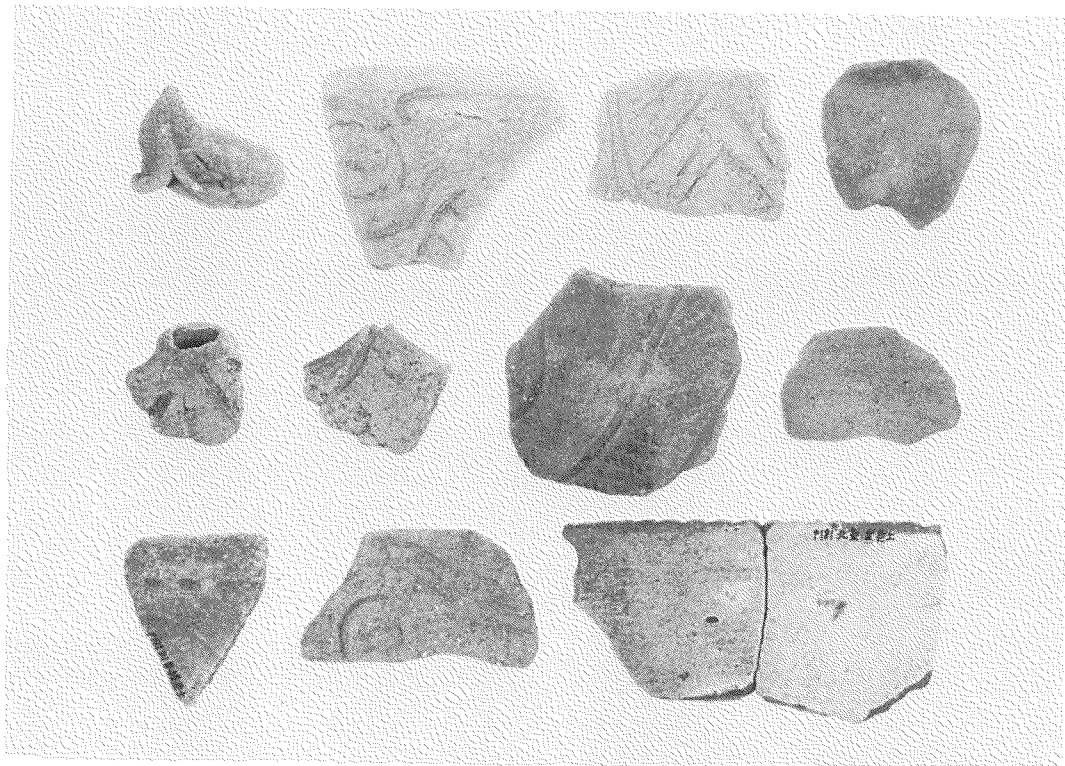


発掘風景（南から）

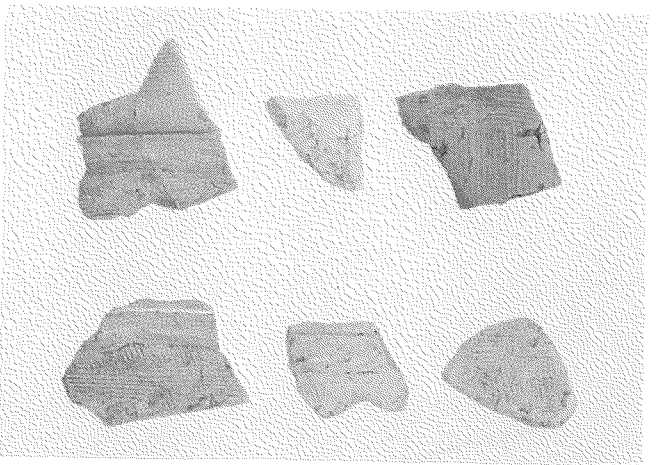
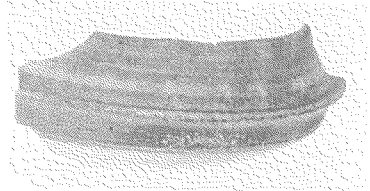
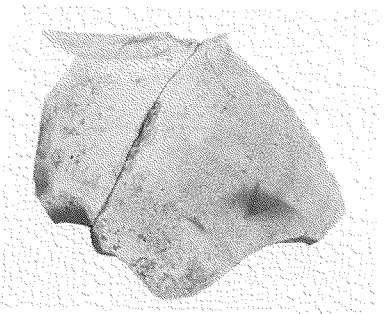
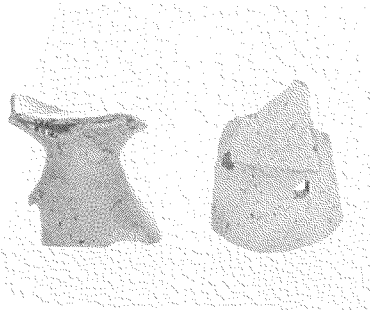
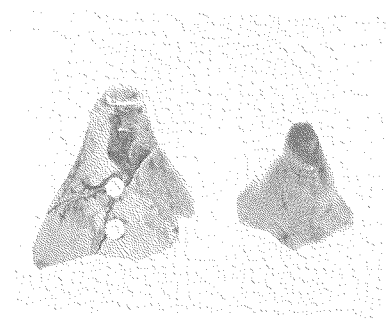
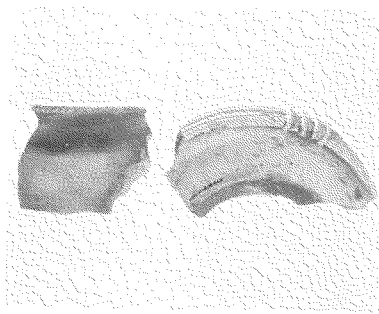
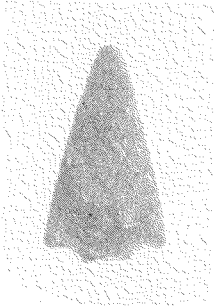
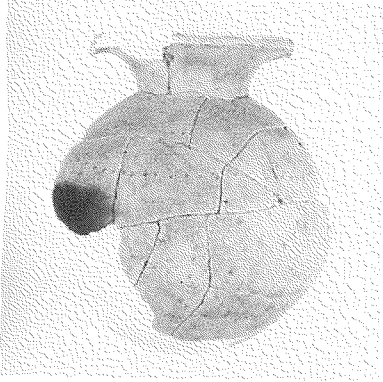


発掘区北側（南から）

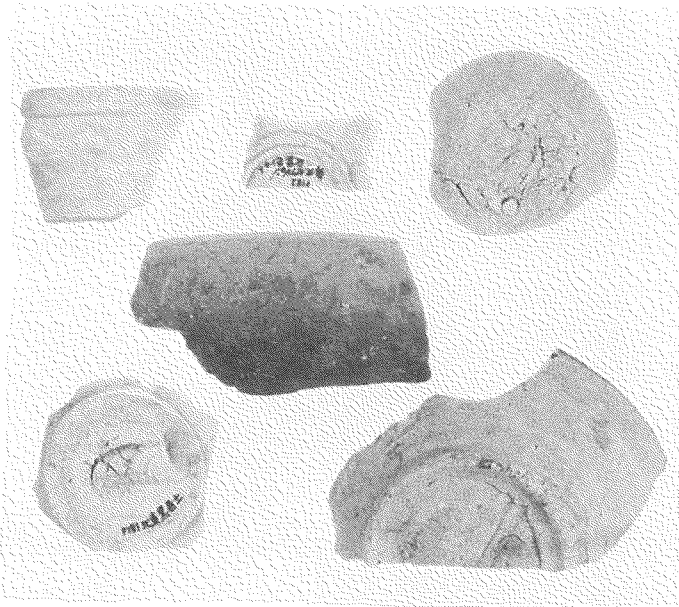
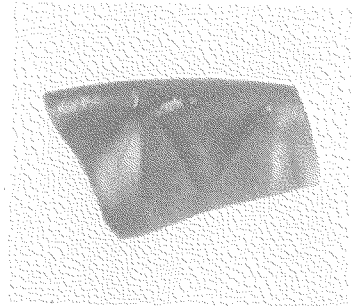
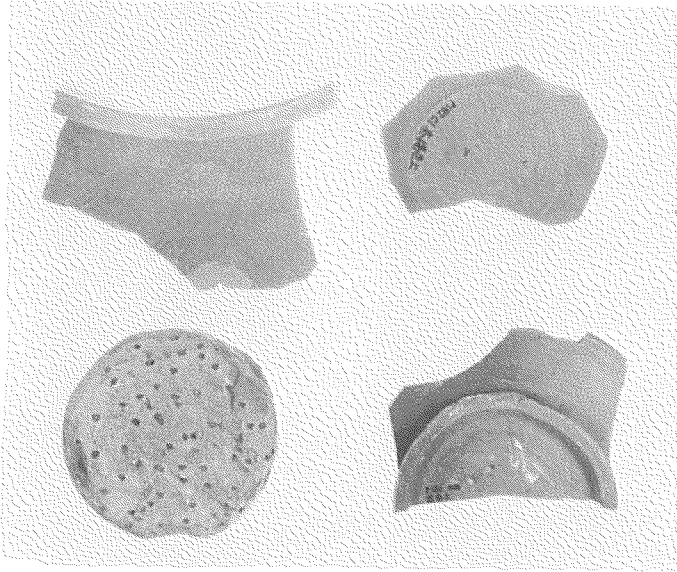
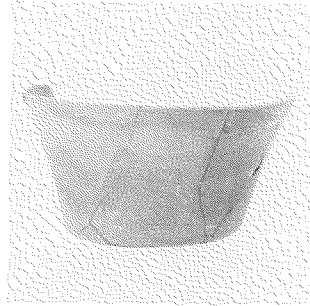
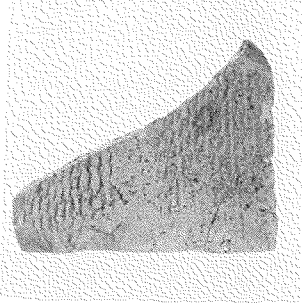
図版 6 縄文時代



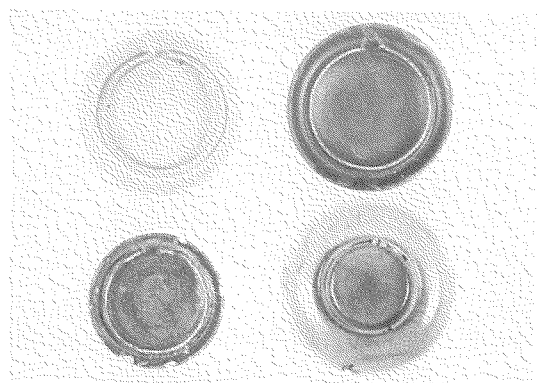
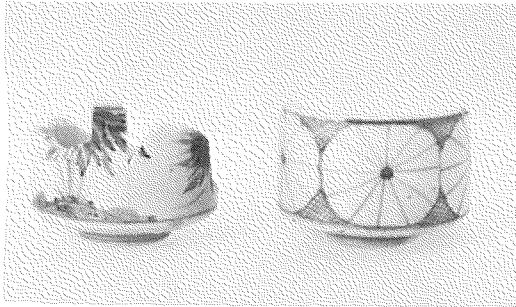
図版 7 弥生～古墳時代



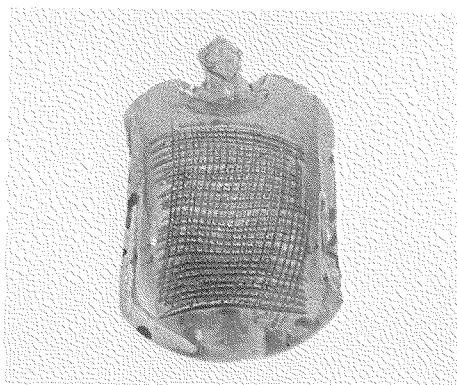
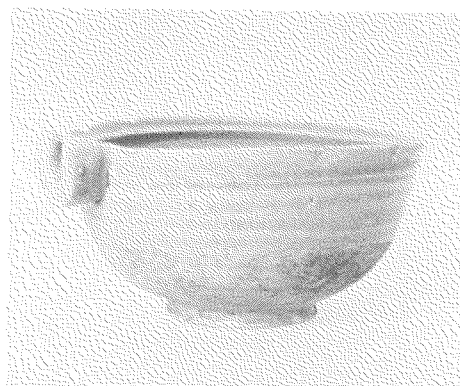
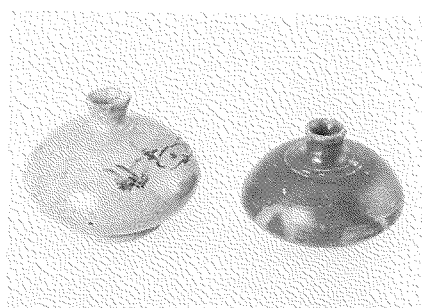
図版 8 古代～中世



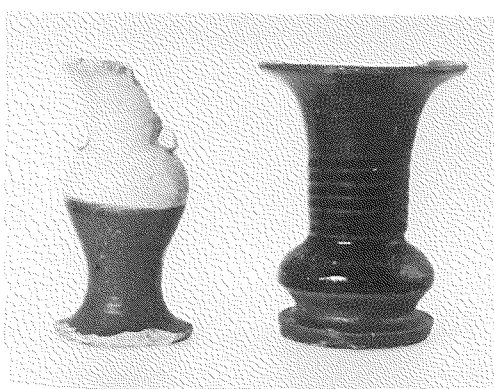
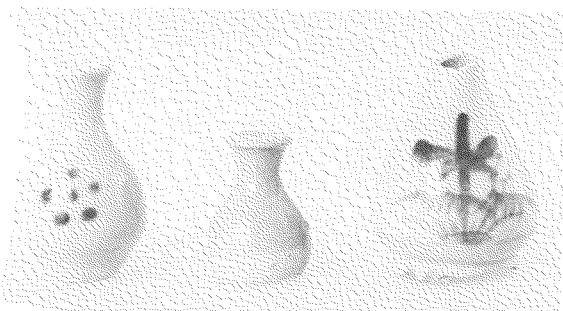
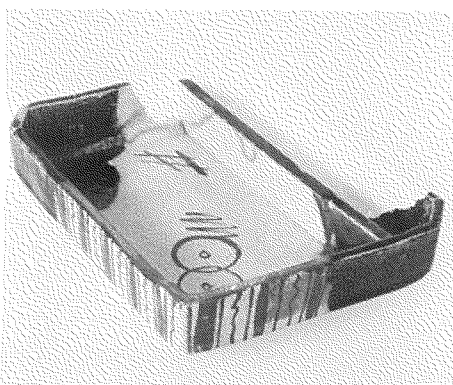
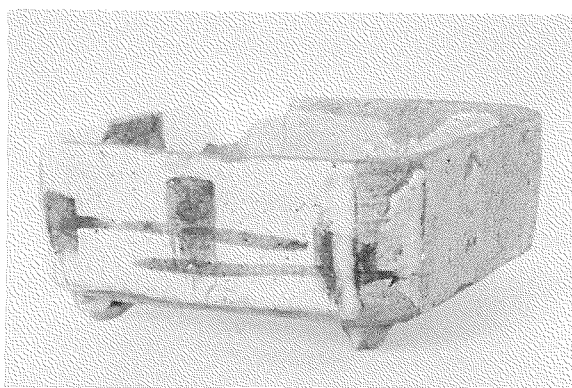
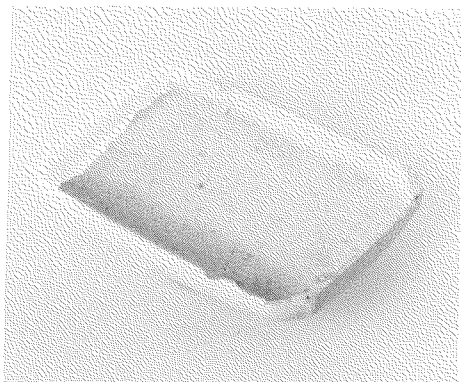
図版9 近世



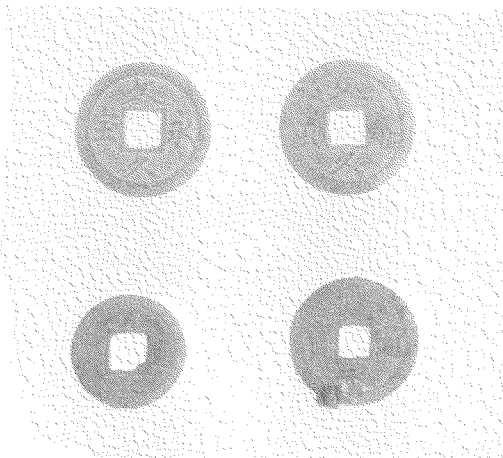
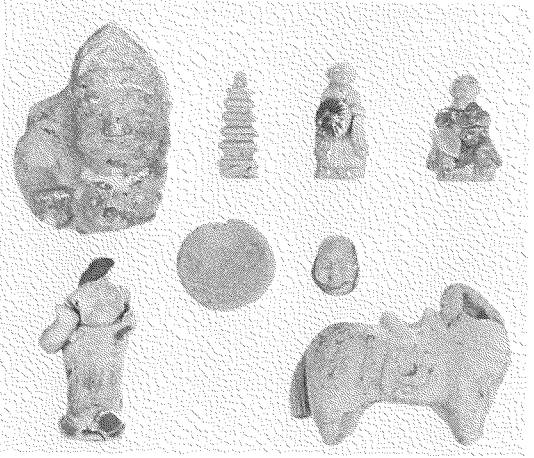
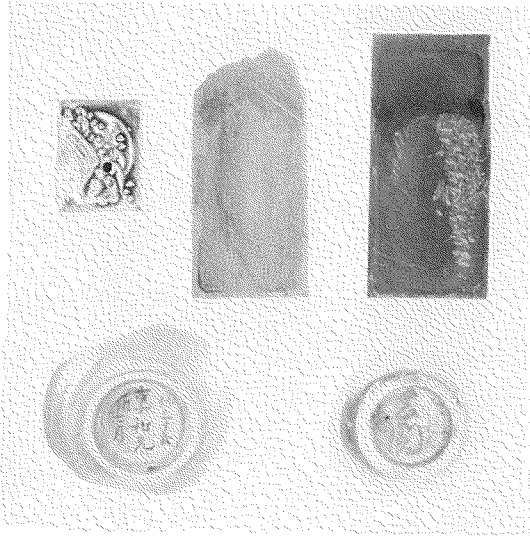
图版10 近 世



图版11 近世



图版12 近世



旧名古屋城下町遺構発掘調査概要報告書

(V)

名古屋市中区大須一丁目・旧紫川遺跡第IV次調査

1986年3月31日 印刷・発行

編 集	名古屋市見晴台考古資料館
発 行	名古屋市教育委員会 名古屋市中区三の丸三丁目1番1号
印 刷	たけうちプリント



